

論文

詩人まど・みちおの作品から学ぶ保育のこころ

淑徳大学社会学部教授

金子 保

1、序 論

淑徳大学大学院社会学研究科と学術交流協定を結んでいる台湾の私立淡江大学日本研究所に、客員教授として1996年4月から1年間滞在したことがある。滞在中、童謡「ぞうさん」で知られる、詩人まど・みちおの作品に大変に感激したことがある。この経験に基づき、帰国後のことであるが、保育士を対象とした講習会・研修会、保育士養成科目の講義の中で、受講生といっしょに詩人まど・みちおの童謡「ぞうさん」を、こころを込めて歌うようにしている。「やぎさんゆうびん」を歌うこともある。まど・みちおの、その他、多数ある作品を、できるだけたくさん、歌うように心がけている。歌えないものは、朗読して聞いてもらうようにしている。そこに、乳児期から始まる保育の、その保育の「こころ」をつかみとることができると思うからである。

ここで、「こころ」とは、「心」ではない。それは、日本人が古代から連綿として使い続けてきた言葉「こころ」である。「こころ」とは、小学館発行の『日本国語大辞典』（第四巻）によれば、「コル（凝）の義を強めてコ字を重ねたココルのルをロに転じ名詞化した語」であるとされる¹⁾。岩波書店発行の『広辞苑』にも、「禽獣などの臓腑のすがたを見て、コル（凝）またはココルといったのが語源か。」とあり、これが転じて、「人間の内臓の通称となり、更に精神の意味に進んだ」とある²⁾。それは、内臓系のこころの機能、感情や情緒性を本質とする言葉であるように思う。他方、こころには思考や論理性を本質とする精神の意味があって、これは大脳系のこころとして知られている。臨床心理学の視座からいえば、内臓系のこころはユング心理学におけるアニマ（anima）、すなわち男性の夢の中に登場する女性像に相当する。他方、大脳系のこころはアニムス（animus）、すなわち女性の夢の中に登場する男性像を意味するものとされる³⁾。前者のこころは「魂」、後者は「精神」と呼ぶこともできるであろう。本論文では、保育の魂、保育の精神、すなわち保育の「こころ」について、まど・みちおの作品を研究資料に、臨床心理学の了解的方法によって検討吟味する。保育のこころとは、いったい、どのようなものか。詩人まど・みちおの作品に学びたいと思う。

さて、童謡「ぞうさん」であるが、この有名な、おそらく日本人なら誰でも知っている

童謡「ぞうさん」は、1952年、昭和27年、12月22日、日本が誇る作曲家、團伊玖磨に手により作曲され、NHKラジオから初放送されている。童謡「犬のおまわりさん」で知られている詩人佐藤義美氏が独断でNHKに持ち込んだもので、この時、第一連の「おはながながいね」を「おはながながいのね」と改稿したといわれている⁴⁾。まど・みちお氏の知らない間に、童謡「ぞうさん」は、世間に飛び立って行ったわけである。その、童謡「ぞうさん」を作詞した詩人まど・みちおとはいかなる人物であるか。『まど・みちお全詩集』（理論社）の巻末掲載の著者紹介によれば、次の通りである。

「まど・みちお／詩人。本名・石田道雄。一九〇九年、山口県徳山市に生まれる。戦前、台湾総督府につとめながら「コドモノクニ」「綴り方倶楽部」「お話の木」などに投稿して北原白秋に詩・童謡を学ぶ。また詩友、水上不二らと詩誌「昆虫列車」を創刊して精力的に詩作をつづける。戦後約十年間、幼児雑誌の編集に携わる。以後詩作に専念する。詩集に『てんぶらびりびり』（大日本図書）、『まめつぼうた』『しゃっくりうた』『いいけしき』（以上理論社）、『まど・みちお詩集 全6巻』『風景詩集』（以上かど書房）、『THE ANIMALS』（すえもりブックス）、『ぼくがここに』（童話屋）があり、童謡集に『ぞうさん』（国土社）、『まど・みちお童謡集』（彌生書房）、童謡曲集に『おおきい木』（ドレミ楽譜出版社）など多数の著書がある。右記の著書や詩作によって、サンケイ児童文化賞、児童福祉文化賞、日本児童文学者協会賞、野間児童文芸賞、巖谷小波文芸賞、小学館文学賞、川崎市文化賞、ダイエー童謡大賞などを受賞。また、本書によって、芸術選奨文部大臣賞、産経児童出版文化賞、路傍の石文学賞特別賞を受賞し、全業績に対し国際アンデルセン賞作家賞が贈られる。」⁵⁾

この中で、すえもりブックス出版の『THE ANIMALS』は、美智子皇后による英訳本であり、これによって詩人まど・みちおは、海外にも知られるようになって、日本人で初めて国際アンデルセン賞の受賞者となったわけである⁶⁾。また、1999年の正月のことであるが、まど・みちおの「長年にわたる優れた子供の詩や童謡の詩作活動に対し98年度朝日賞の授賞」が決定している。このことが報道された日の、朝日新聞天声人語の執筆者は、まど・みちおの詩について、「その詩はわかりやすい。温かい。おかしみに満ちている。しかし、かなしい。きびしい。すごみがある。近年、ますます本質をきわめ、哲学的になってきたように思う。」⁷⁾と評している。

そこで、改めて、まど・みちおの詩集を読んでもみると、天声人語執筆者の評価は適切だと思わないわけにはいかない。たとえば、台湾総督府に技師として勤務していた台湾時代の作品「竹の林」（1937）を読みたい。

「竹の林に／はいりこんでいくと／みるみる みるみる／竹になる なるなる／／顔がお腹が／空へ空へのびて／あおあお あおあお／青竹に なるなる／／竹の林で／竹になっていると／とおくで とおくで／僕をよぶ よんでる／／みちおさーん／みちおさーん」⁸⁾

戦前の台湾時代の作品である。台北工業学校土木科を二番で卒業した石田道雄、すなわ

ち後年の詩人まど・みちおは、台湾総督府道路港湾課の技師になり、道路、橋梁工事の測量、設計、施工にかかわる。台湾は九州ほどの大きさであるが、山は高く谷は深い。深い谷や大きな河川が多く、橋梁工事は不可欠であるが、また竹林が多く、竹の子も種類が豊富で、果物のような竹の子もあって、そのままでも美味しく、サラダのようにして食べる。それは、まど・みちおが橋梁工事のため、台北市から百キロばかり南方の、ピーフンで有名な新竹市に滞在中のことだったそうである。今でも立派に使われているようであるが、「客雅溪橋」の工事現場に、仕事が終わったころになると誘いに來る近所の子どもたちがいて、まど氏は子どもたちと陣取り遊びに夢中になり、あるときは「熱中のあまり女の子と真正面からぶつかって、まどさんは前歯を折り、その子が額に傷をつくるような出来事もあった」⁹⁾ そうである。このエピソードは、童謡「さっちゃん」で知られている阪田寛夫が綿密な現地取材を重ねて書きあげた小説『まどさん』に書かれている。

ところで、遊びの世界は、現実の世界とは違う。子どもは、思わず知らず遊びの世界に入り込んでしまう。淑徳大学千葉キャンパスは浄土宗の関東十八檀林の一つとして著名な大巖寺に隣接しているが、大巖寺には孟宗竹の、それは見事な竹林がある。授業の行き帰りに、大巖寺の竹林の脇を通ることがある。思わず見上げると、天まで続くような、その見事さに圧倒される。詩人まど・みちおは、竹林の中で、興味津々、遊び心いっぱいになって歩き回り、しまいには竹そのものになって夢中になってしまったこともあったに相違ない。「竹になっていると／とおくで とおくで」自分を呼ぶ声が聞こえてくる。最初はかすかに、やがてははっきりと、聞こえてくる。「みちおさーん、みちおさーん、みちおさーあん…」と。

多分、それは母親の声ではなかったか、と思う。というのも、母親は2歳上の兄と2歳下の妹を連れて、単身赴任中の夫が待つ台湾に渡るが、そのとき、まど氏は5歳だったわけである。『まど・みちお全詩集』の巻末の年譜によれば、大正4年4月の「ある朝、目を覚ますと、家の中がひっそりとしており、母、兄、妹がいなかった。祖父正敬の言葉から置き去りにされたことを知る。徳山で祖父と二人だけの生活が始まる。」¹⁰⁾ とある。祖父は毛利支藩の侍上がりで、学問もあり誇りの高い人だったそうである。母親シカは、ひとり取り残される祖父正敬の不安をおもんばかって、次男のみちおを祖父の手元に残して、養育費を送金する約束をしたのだという。おとなしく、手がかからないという理由で、長男ではなく、次男の道雄を残していったようである。年金や介護保険の制度など整備されていない戦前の話である。幼い道雄は、祖父と二人だけの生活だったわけであり、『まど・みちお全詩集』に記載の通り、「淋しい日々」が続いたと想像される。しかし、「淋しい日々」とは大人から見てのことで、実際には淋しくもなかったかと思う。その理由は、次の通りである。1993年に、まど・みちおは一枚の抽象画についてエッセイを書いているが、その中で「気に入ったら気がすむまで見惚れている」¹¹⁾ ことがあるという。おそらく、まど・みちおは版画家として著名な棟方志功の子ども時代を思わせるような、スマイルの花やダンゴ虫や、トンボやカエルや、タブの木の太木やコノハズク、虹や雲や青空に見惚れてしま

うような、そういう子どもだった、と思われるからである。

それから、祖父との暮らしが5年間続いたのである。10歳のとき、まど・みちおも叔母に連れられて台湾に渡るが、長年、別れて暮らしていたためか、母親は、兄や妹と違って、まど・みちおを呼びつけではなくサン付けで呼んでいたというのである。「みちおさーん、みちおさーん」と。その母親の声に「はっ」と、われに返る。センダックの絵本『かいじゅうのいるところ』¹²⁾に見るように、現実の世界に引き戻される。『かいじゅうたちのいるしま』では、マックスが怪獣遊びに熱中していると、ママが作ったスープの、いいにおいがしてくる。食べてしまいたいくらい大好きだからもっといて欲しいという怪獣たちの島から、食べてしまいたいくらい大好きだというのが口癖のママによって現実世界に引き戻されるのである。思うに、大人からすれば、だから遊びにも躰が必要だということになる。遊びと現実の世界を自由に往来できるようになるまでの幼少期、「いつまでも遊んでるんじゃないのよ」と注意を受ける必要があるわけである。しかし、厄介なことに、子どもが遊ぶところの世界は目に見えない。それは、赤々と燃える炎に喩えられる。遊び道具や遊び相手、それから遊びの残骸は目に見えるが、遊びに夢中の子どもの、燃え盛るころの炎は見えない。それは、目に見えない世界、想像の世界のできごとである。しかし、詩人まど・みちおの目には見えているであろうと思う。そのことが理解できないと、次の詩「かいだん」(1982)は哲学的で、難解な作品ということになる。

「かいだんを のぼった／一だん 一だん のぼった／のぼりつめて ほっとしたら／まだ そらへと つづいていた／みえない かいだんが…／そして そこを のぼっていた／なにかが まぶしく／どこまでも どこまでも／わたしの だいりのように／／かいだんを くだった／一だん 一だん くだった／くだりおえて ほっとしたら／まだ ちかへと つづいていた／みえない かいだんが…／そして そこを くだっていた／なにかが ひとりで／とぼとぼと とぼとぼと／わたしの だいりのように」

この作品中の「見えない階段」は、想像の世界、遊びの世界に属する。それは、こころの世界のイメージである。夢の世界といってもよい。それは、死後の世界に向かう階段にも思われる。輪廻転生、階段の向こうには、もう一つの生涯が待っているのである。あるいは、永遠のいのちがあるというのであろうか。信仰の世界、宗教の世界を思わせる作品だといってもよい。このように、まど・みちおの詩は、「天声人語」の指摘の通り、「近年、ますます本質をきわめ、哲学的になってきたように」思われるのである。しかし、ここではまど・みちおの作品から、冒頭に述べた「保育のこころ」を読み取りたいと思う。そして、できれば、まど・みちおの保育のこころとは何であるのか考えてみたい。しかし、まど・みちおの詩作品から「保育のこころ」を取り出すことは可能であろうか。

まど・みちおは、『まど・みちお全詩集』の著者紹介にもある通り、「戦後約十年間、幼児雑誌の編集に携わる」時期がある。1948年、昭和23年10月、『コドモノクニ』が復刊するというので、まど氏は発行もとの婦人画報社に入社している¹³⁾。この、『コドモノクニ』は『チャイルドブック』に誌名変更して創刊され、まど・みちおは編集長になってい

る。同年の7月には、この保育雑誌『チャイルドブック』は、国民刊行会の発行となり、それから約10年間編集の仕事に携わっていたのである。幼児保育に関連した雑誌の編集の仕事をしてながら、まど・みちお自身も作品を発表していたのである。ひたすら幼児と、幼児の保育のことを考えていた時期があったわけであり、その後詩作に専念するようになってからも、子どもの世界を題材にした作品が多く知られている。こうしたわけで、詩人まど・みちおの作品から、保育のこころを読み取ることができると思うのである。

2、「ぞうさん」から学ぶ

第一に、「ぞうさん」(1951)を取り上げる。まず、読んで、そして歌って欲しい。

「ぞうさん／ぞうさん／おはなが ながいのね／そうよ／かあさんも ながいのよ／／ぞうさん／ぞうさん／だれが すきなよ／あのね／かあさんが すきなよ」

わたしは長い間、この童謡は、動物園の象舎の前で、親がわが子に、あるいは保育園の保育士が園児に対し、「ほらゾウさんだよ、お鼻が長いね」と説明している、ほほえましい情景を歌ったものと思って過ごしてきた。1998年のことであるが、わたしは先述の通り淑徳大学大学院と学術交流協定を結んでいる台湾の私立大学、淡江大学日本研究所に一年間滞在する機会を得たのであるが、このとき、台北市の目抜き通り、中山北路にある永漢書局の店頭で谷悦子著『まど・みちおー詩と童謡』という本を手に取り、実に驚かされた。まど・みちおは、既に触れたように、山口県徳山市生まれであるが、10歳のときに台湾に渡り、台北市萬華の、台湾最古の仏教寺院として知られる龍山寺の付近に住んでいたわけである。その辺りは東京の浅草界隈のような賑わいで、隣接してスラム街があったという。スラムの貧しい人々の生活と隣り合わせの日本人住宅に生活していたのである。そして、次のようなことをしゃべっているというのである。

「この地球上の動物はみんな鼻は長くないのです。そういう状況の中で『おまえは鼻が長いね』と言われたとしたら、それは『お前は不具だね』と言われたように受け取るのが普通だと思います。しかるにこのゾウは、いかにも嬉しそうに『そうよ、母さんも長いよ』と答えます。長いねと言ってくれたのが嬉しくてたまらないかのように、褒められたかのように、自分も長いだけでなく自分の一番大好きなこの世で一番尊敬しているお母さんも長いよと、誇らしげに答えます。このゾウがこのように答えることができたのはなぜかといえば、それはこの象がかねがねゾウとして生かされていることを素晴らしいことだと思ひ幸せに思ひ有難がっているからです。誇りに思っているからです。(中略)ゾウに限りません。けものでも虫でも魚でも鳥でも、いいえ草でも木でも数かぎりない生き物がみんな夫々の個性を持たされて生かされていることは、何物にもかえられない素晴らしいことです。もちろんその中の一員として、人間が人間として生かされているのは本当に素晴らしいことです。」¹⁴⁾

童謡『ぞうさん』は、象を見ている子どもに、「あれがぞうさんだよ」などと単に説明し

ている歌だと思っていたのであるが、そうではなかったのである。「ぞうさん」とは、植民地時代に差別されていた台湾人ではなかったのか、そう思ったとき、すごい歌だなあ、と思ったのである。ぞうさんの長い鼻、それはいじめの対象にもなりかねないものである。ところが象の子どもは、自慢しているのである。「そうよ」のところで、いじめの対象にもなりかねない長い鼻を、なんと自慢の鼻に変えてしまうのである。そのように変えることができたのは、まど・みちおによれば、大好きなお母さん、尊敬しているお母さんもまた長い鼻を持っているという事実の指摘にある、というのである。このことを、第一に「ぞうさん」から学ぶことができる。発達心理学の立場から言えば、愛情によってしっかりと結びついている、心から信頼しているお母さんがいるから、ぞうさんは長い鼻を自慢できるのである。子どもにとって、そういうお母さんが是非とも必要である。愛情による永続的で相互的な人間的結合、相思相愛の関係、これを発達心理学ではアタッチメント (attachment) という。アタッチメントを理論化したイギリスの児童精神分析医ジョン・ボウルビー (John Bowlby, 1951) は、からだの成長にとって蛋白質が不可欠であるように、こころの発達にとってアタッチメントは不可欠である、と論述している¹⁵⁾。そのアタッチメントの重要性を鋭く指摘している。

それと、もうひとつ重要なのは、象として生かされていることを素晴らしいことだと思ひ、幸せに思ひ、誇りに思っている点である。こういうことを教えてくれたお父さんがいたに違いないのである。長い鼻、それはぞうさんにとって、ときには苦しく逃げ出したい事実として迫ってくるものである。しかし、いつかその長い鼻に、向き直らなければならない「とき」が来る。向き直って、大死一番の覚悟で、正面から見据えなければならない。このような人間の精神を、身を以って示した人物の一人として淑徳大学開学者、長谷川良信をあげることができる。長谷川良信は、当時死の病とされていた結核に侵されている身であったが、大正 8 年、那古船形の療養所から帰京し、西巢鴨のスラム街、通称「二百軒長屋」に単身住みこみ、セツルメント・ハウスとして知られるマハヤナ学園を創設する。その時の実践指針「トゥギャザー・ウィズ・ヒム」こそは、淑徳大学建学の精神である。「人の為ではなく、人と共にでなくてはならない」という意味であり、「共生」ということである。ここで、共生とは、ただいっしょにいるだけですむものではない。辛い事実を正面に見据えて共に生きることである。たとえば、障害児の共生保育を考えたとき、障害をもつ子どもの、それによって付随する辛く苦しい事実を直視する、向き直ることである。それは、「お母さん」だけに任せておいて済ますことのできない、そんなに生易しい課題ではない。母性と共に、父性が必要だということである。

ところで、『まど・みちお全詩集』を開くと、ぞうさんを題材にした詩が、もうひとつ目に留まる。戦前、『昆虫列車』に掲載の「コドモノゾウサン」(1939) という作品である。これは読んでみると、母性というより、父性あるいは男性性が前面に出ている作品のように思われる。

「オハナノ オハナノ ブランコニ、イチドデ イイカラ ノッケテヨ。チョロチョロ ク

ルノハ コリスダナ。／オミミノ オミミノ ナツパダケ、チョットデ イイカラ ツツ
カセテヨ。アマエテ クルノハ ススメダナ。／オナカノ オナカノ コノタンク、ダレ
デモ クルヤツ ヒイチャウゾ。／コドモノ ゾウサン エラソウニ、ヨコメデ ニラン
デ ミセマシタ。」

気はやさしくて力持ちの男の子の理想像が書かれ、そこには強い父親への憧憬を思わせる。父親は、子どもに心の世界を広げる役割を果たす。死に対しても、向き直る強さを教えることができる。次の詩「ヘビ」(1985)は、父親がヘビの死体を埋葬する話であるが、この作品は、父性を思わせる。そして、保育にはこうした父性が不可欠であるように思います。

「あの日のことが／今ごろになって 時々思い出される／ヘビは 門のところにいた／ヘビの口には アリたちが／出たりはいったりしていた／／なんだ 死んでるのか といっ
て／父があなを掘って うめたが／その間じゅう／ヘビは長くて おとなしくて／生きて
いるものが／してくれるようにしていた／そして あたしたちは／ああ これでよかった
と思った／／けれども あのあと／ほんとうに 無事だったろうか／あの生きていたアリた
ちは／土の中なら お手のものさと／笑いながら帰っていただろうか／ほんとうに みんな
で笑いながら…／／帰っていかたとして／帰るまえに／だれかが ふさいであげただろ
うか／ぱっちりを見ひらいて／空のようにすんでいたあのヘビの目を」

ヘビはどういうわけか怖い。子どもの頃の話であるが、玄関先のヘビにギョッとさせられ、裏口から出たことがある。あるいは、鎌倉から円海山を目指して山道を一人で歩いていたとき、日溜まりの小道いっぱいには休息中と思われる青大将がいて、その瞬間、足がすくんでしまう思いに駆られた経験を思い出すことができる。引き帰すわけにもいかず、思いつき助走して飛び越えて、恐ろしくて走って逃げたことであった。しかし、この詩で父親は「なんだ死んでいるのか」と、ヘビの死体を庭の片隅に埋葬するのである。生きているヘビは、不安や恐れの特徴であるが、埋葬されて見えなくなったヘビは、子どもにとって「制止された恐れ」を意味するものである。こうして不安と恐れは鎮められ、「ああこれでよかった」と思うのである。そうやって初めて、つまり、自分の、こころの中の不安や恐れを克服して初めて、死んだヘビといっしょに、生きたまま土に埋められたアリたちは「無事だったろうか」という思い、「思いやりのこころ」を持つことができることを、この詩は示している。しかも、「空のようにすんでいたあのヘビの目を」の末尾の一句からは、それが詩人にとって、「願望」であることがわかる。あんなに「空のように澄んでいた目」をもったヘビをどうして恐れたのだろうか。きっとヘビは安らかで永遠の眠りについていないに違いない、と思えてくるのである。母親や父親との愛情による永続的な信頼関係、人間的な結合、アタッチメントによって、乳幼児の不安や恐れは鎮められ、鎮められると、こころは外に向くようになり、見慣れない人物や事物に興味関心を抱くようになって、これを取り込んで噛み砕くような面白い経験、これを探索行動というが、この探索行動によって不安や恐れの原因となっていた「新奇性」が消滅すると考えられる。そして、安心し

た子どもは、今度は、立場を換えて、この世界を眺めることができる。そこに、相手の立場を思いやるところが生じてくるのである。

3、「やぎさん ゆうびん」から学ぶ

次に、「やぎさんゆうびん」(1951)を取り上げたい。この詩も、まずは読んで、そして歌ってみて欲しい。

「しろやぎさんから おてがみ ついた／くろやぎさんたら よまずに たべた／／しかたがないので おてがみ かいたーさっきの おてがみ／ごようじ なあに／／くろやぎさんから おてがみ ついた／しろやぎさんたら よまずに たべた／／しかたがないので おてがみ かいたーさっきの おてがみ／ごようじ なあに」

串田和美が主宰する自由劇場で、吉田日出子が歌った「ドタ靴はいた青空ブギ」というミュージカルを銀座の博品館で見たことがある。それは、敗戦直後の横浜の孤児院が舞台であったが、その当時は、どうしようもない食糧難の時代で、吉田日出子扮する戦災孤児は、焼け跡の只中に立って底抜けに明るく歌うのである。その歌声からは、からだは空腹でも、ここでは青空のように澄んでいたことがわかる。当時は、日本列島総難民状態だったわけで、特に沖縄の陸上戦と、広島、長崎の原爆はいうまでもなく、B29の空襲を受けた都市部の戦後はむちゃくちゃだった。外国の食糧援助を受けていた時代なのである。淑徳大学社会学部社会福祉学科の多々良紀夫教授の研究によれば、ララ物資はアメリカ、カナダ、さらに南米のキリスト教団体や日系人組織によるものであるが、救援物資の中には「生きた山羊」も含まれていたとのことである¹⁶⁾。その当時の山羊は、紙も食べたであろう。紙を食べる山羊を見た子どもは、厳しい食糧難の当時、紙が食べられる山羊がうらやましかった、と思うのである。そういう子どもばかりの時代に、「やぎさんゆうびん」は作られたのである。その山羊であるが、紙を食べることができる、うらやましいような山羊であるが、せっかくの通信文まで食べてしまう、そそっかしい山羊、馬鹿な山羊が、おかしいわけで、かわいいわけである。

しかし、いまこの童謡を、保育のころを読み取ろうとして吟味してみると、まず気づかれるのは、白やぎと黒やぎとの手紙によるやり取りの相互性である。しかも、ここで大事な点は、終わりのない相互性だということである。エンドレスに続くのである。それは、ノーベル賞作家として知られるフランスのカミュによる『シジフォスの神話』を思わせる永遠の繰り返しではないかと思う。シジフォスは天罰によって大きな岩を山頂に繰り返し運び上げる。この永遠に繰り返される労働がシジフォスの天から受けた罰なのである。ところが、麓に向って転がり落ちていく大岩、これを追いかけるシジフォスの顔は輝いて見えるのであり、「幸福なのだと思わねばならぬ」と、カミュは書いている¹⁷⁾。毎回、毎回、永遠に繰り返される罰だというのに、面白くてしょうがない。これでは天罰にならない。その転換点は、大死一番の覚悟にある。天罰から逃れるのではなく、遣り過ぎすのでもな

く、真正面に見据えて、取り組む点にある。トゥギャザーウィズヒムの精神である。保育も事情はかわらないことを、「やぎさんゆうびん」から学ぶことができる。考えてみれば、保育の仕事は判で押したような日々である。しかし、同じではない。日々創り出されるものがある。たとえば、子どもと保育者の間に繰り返される相互のやり取り、それは日々の保育の活動そのものといえる。愛情による人間的結合は、こうした相互のダイナミズムによって持続され、強化されるのである。

ところで、戦前の定期刊行物『昆虫列車』には、もうひとつの「ヤギサンユウビン」(1939)が発表されている。

「オヤヤギ カラ キタ オテガミ ヲ/コヤギ ハ メイメイ タベテ カラ//『ゴハン ジャナクテ オテガミ モ/クダサリヤ イイノニ カアサン ハ』//コヤギ カラ キタ オテガミ ヲ /オヤヤギ メイメイ タベテ カラ//『ゴハン ジャナクテ オテガミ モ/クレレバ イイノニ ウチノコ ハ』

どこか、相互にうらんでいるというか、非難めいた雰囲気があって、こうしたやぎさんは感心しない。お手本にできない親子の話として書かれているように思われる。ところが、さきの「やぎさんゆうびん」では、相互の持続する関係が歌われている。愛情による人間的なつながり、結合をアタッチメントというのであるが、それは死して猶、人を孤独にさせない力を持っている。そのアタッチメントは、母親や父親との間ばかりか、犬のポチとの間にも成り立つようである。東洋では、犬どころか山川草木に対しても、愛情関係は成り立つようである。たとえば、次ぎの詩「おとおさん」(1978)を読んでみて欲しい。

「おとうさんが かえってくると/ポチが よろこぶ/ぼくが よろこぶ/おかあさんが よろこぶ//そいで/いちばん よろこぶのは/おとうさん/ビールも/そばで よろこんでる」

4コマ漫画をみるような、おかしみが沸いてくるのではないか。天声人語氏にいわせれば、「わかりやすい、温かい、おかしみに満ちた」作品であると思われる。「ビールもそばで喜んでる」という4コマ目が特に効果的なわけで、おかしいわけである。ビールにも人格性が歌われているわけで、わたしは、この詩には、愛情関係の相互性を酒や月や山に託した唐の詩聖・李白の詩を思わせる味わいがある、と思っている。窓から見える空や雲や風、虫や雀や鳥、樹木や草花、雨や雪、…保育所や乳児院の子どもたちが散歩コースの途中で出会う四季折々の都会の自然にも目を向けさせたいものである。その「木や草や、鳥や虫、山や川、星や月」との間にも、双方向的なトゥーウェイの関係を取り結ぶことができる。それは、育てる者の意識にかかわるわけで、私たち保育者の鍛え方の問題であり、大切に考えたいと思う。

ところで、アタッチメントも、人物や事物や自然ばかりか、きわまると死して猶人を孤独にさせないまでになる。次の詩「マツノキ」(1979)は、明らかに、死してなお崩れない愛情による相互的な人間的結合が歌われていると思う。

「マツノキの ある/この みちを ゆけば//マツノキが あって/かぜが さわさわ

ぼくの ポチが／きょう しんだのに／／マツノキが あって／マツの たかみで／／マツの かぜが／きょうも さわさわ／／ポチの ぼくが／この みちを ゆけば」

僕のポチという一方的な、ワンウェイの関係ではなく、ポチの僕だったのである。ポチが死んで、そのことが「僕」にわかったのである。「ポチの僕がこのみちをゆけば」という末尾の一句から、双方向的な、相互的な、トゥーウェイの関係だったことがわかる仕組みになっている詩であり、厳しく、悲しい詩である。しかし、そこに、死んだポチに対する、限りなく深い鎮魂の思いが受け取られるわけである。

4、「一ねんせいになったら」から学ぶ

童謡「一ねんせいになったら」(1965)からも、保育の「こころ」を学ぶことができる。願望保育の重要性が学べると思う。ところで、願望と欲望は違う。欲望は生来的な動機であるが、願望は保育・教育によって獲得される動機である。それというのも、「欲望は自分の過去経験の再現動機」であるが、「願望は他人の過去の模倣」である¹⁸⁾。願望は、聞くところによると、実にすばらしいそうだ、という話がもとになって獲得されることがある。すなわち、幸福な他人の過去を自己の未来に反復しようとする動機である。「あこがれ」といってもよい。自分独特のあこがれは、自分に独特の方法で実現し得たとき、反復や模倣にはない、価値創造の役割を果たすことができる。一例を挙げれば、年長児の上手な絵を見て、年少児はあこがれる。あんな絵が書きたいという願望が、あこがれの絵を書かせ、やがてもっと素晴らしい絵が書けるように発達するのである。

このような意味で、願望の保育は、保育現場でもっと大事にしてほしいと思われる。まど・みちおの作品には「願望保育」を歌った作品が多いが、その中でも名曲は、「一ねんせいになったら」である。ぜひ、子どもたちと一緒に元気よく歌って欲しい。

「一ねんせいになつたら／一ねんせいになつたら／ともだち ひやくにん できるかな／ひやくにんで たべたいな／ふじさんの うえで おにぎりを／ぱっくん ぱっくん／ぱっくんと／／一ねんせいになつたら／一ねんせいになつたら／ともだち ひやくにん できるかな／ひやくにんで かけたいな／につぼんじゅうを ひとまわり／どっしん どっしん／どっしんと／／一ねんせいになつたら／一ねんせいになつたら／ともだち ひやくにん できるかな／ひやくにんで わらいたい／せかいじゅうを ふるわせて／わっはは わっはは／わっはっは」

次の「ふしぎなポケット」(1954)も願望を歌ったものである。食糧難の時代、一枚のビスケットは貴重である。そのビスケットがポケットをたたくと増えるというのである。ビスケットは欲望の対象であるが、たたくと増えるポケット、それは願望の対象といわなくてはならない。

「ポケットの なかには／ビスケットが ひとつ／ポケットを たたくと／ビスケットは ふたつ／／もひとつ たたくと／ビスケットは みつつ／たたいて みるたび／ビスケッ

トは ふえる／／そんな ふしぎな／ポケットが ほしい／そんな ふしぎな／ポケット
がほしい」

「おにぎりころりん」(1965)のテーマも願望だと思う。おにぎりを食べるのは欲望であるが、今まさに、母さんの手から生まれてくる、そのおにぎりを食べるのは、それは願望である。そこには、待ち望む、未来の世界があるわけで、背伸びした、未来に目を向けた、青空のように澄んだ心を考えることができる。

「かあさんの てから／おもしろそうに／うまれてくるのは ならぶのは／おにぎりころ
りん ぎゅっころりん／ぎゅっころ らん／ぎゅっころ／ぎゅっ ぎゅっ／ぎゅっころりん／
どこかへ はやく／つれてってって／さんかく あたまで せがむのは／おにぎりころり
ん ぎゅっころりん／ぎゅっころ らん／ぎゅっころ／ぎゅっ ぎゅっ／ぎゅっころりん」

5、「いくら なんでも」から学ぶ

もうひとつ、まど・みちおの詩から、保育のこころを読み取ろうとしたとき、落とせないテーマに、人間性を主張する一群の作品がある。それは、他者を人間として考え、人間として扱うことである。児童虐待、高齢者虐待、婦人虐待等、虐待の事件は後を断たない。その根本的な原因は、虐待する人は子どもや老人を人間として考えられない点にある。物のように扱う、「鬼」のように恐ろしいところによるものである。児童福祉法の精神に基づけば、人権といったらよいと思う。その人権、もちろん、この場合には「子どもの人権」であるが、詩人まど・みちおは、それを「いくら なんでも」(1975)という詩作品で、こんな風に、わかりやすく歌うのである。

「にんげんには／なく／わらう／うたう／はなす／いのる／ささやく／さけぶ／いう／な
どと／つかいわけけるのに／／ただ／なく／だけでは／いくらなんでも／わるいではないか
スズメや／セミや／ブタや／ウシや／カエルなんかは…／／いくらなんでも…」

他の生物に対する人間の横暴を歌っているように解釈されやすい詩であるかと思うが、わたしには、「スズメやセミやブタやウシやカエル」は、憎しみや蔑みの目で見られる人間、差別される人間、問題外の人間、勘定に入らない人間、人間として扱われない人間、つまり、スズメやセミやブタやウシやカエルのような人間のことだと思える。実に「すごみのある作品」だと思われる。「ぞうさん」とテーマは同じなのである。

それでは、どうすればよいのか。重症心身障害福祉の分野で糸賀一雄とともに忘れることのできない淑徳大学の藤村哲教授の口癖は、「無知、無理解が偏見を作り、偏見が差別を生み出す」であった。制度としての差別も、わたしたちの偏見が支えているというのである。そうであれば、偏見を取り払う努力が必要になるが、ことはそう簡単にはいかない。とりあえず、子ども時代からの保育・教育がカギではないか、と思われる。詩人まど・みちおに云わせれば、スズメやセミやブタやウシやカエルにも、ことばがあるという。ことばがあれば、わかるわけである。理解されるわけである。これによって、無知・無理解は多少

克服に向かうことができるかもしれない。しかし、そのわかり方は、本当のわかり方ではない。次の「たんぼぼ」(1974)の詩は、ほほえましく、楽しいものであるが、わたしには、まど・みちおが本当のわかり方を提案しているようで、これも凄みのある歌に思えるのである。

「だれでも タンポポをすきです／どうぶつたちも 大すきです／でも どうぶつたちは
／タンポポの ことを／タンポポとはいいません／めいめい こう よんでいます／／イ
ヌ…ワンフオフオ／ウシ…ターモーモ／ハト…ポッポン／カラス…ターター／デンデンム
シ…タンタンポ／タニシ…タンココ／カエル…ポポタ／ナメクジ…タヌーベ／テントウム
シ…タンポンタン／ヘビ…タン／チョウチョウ…ポポポポ」

虫や鳥や草や木とも対話のできる心、それは明らかに幼少期に養われる。「たんぼぼ」の詩は、子どもには大受け間違い無しであるが、幼少期の子どもでなくともわかる詩、それが「おならはえらい」(1985)という作品である。

「おならは えらい／／でてきた とき／きちんと／あいさつ する／／こんにちは 也
もあり／さようなら でもある／あいさつを…／／せかいじゅうの／どこの／だれにでも
／わかる ことばで…／／えらい／まったく えらい」

「芸術は爆発だ」とは、画家岡本太郎の主張であるが、詩人まど・みちおによれば、芸術は、おならのようなものだというであろう。それは、世界中の、どこの誰にでも、わかることばで、きちんと伝えることができる、と考えられるからであるが、絵や音楽のわかる心、このような心を育てることも、幼少期の保育の重要な課題だといえよう。

6、結 論

最後に、とても難解な作品を取り上げたい。「いちばんぼし」(1969)という作品である。
「いちばんぼしが だた／うちゅうの／目のようだ／／ああ／うちゅうが／ぼくを みて
いる」

「うちゅうの目」とは、何であろうか。自分が見えている星、その星が自分を見ているというのである。それは、立場の可逆性をうたっている。ポチの死をうたった作品も、ポチが自分を見ていたことに気付くわけである。立場の可逆性は愛情によって結ばれたアタッチメント関係にある者同士を意味していると思う。しかし、宇宙が見ているというのは、それは、自然の創造者の目、信仰心のある方なら「神仏の目」とでもいったらよいと思われる。西郷隆盛の座右の銘、「敬天愛人」の天かもしれない。福沢諭吉の「天は人の上に人を造らずといへり」の天かもしれない。それは、究極の「あこがれや願望の対象」といったらよい。その天によって、私たちは生かされている。次の「いき」(1986)は、その実感を歌った作品であるかと思う。

「いきを とめたら／だれだって しぬ／でも わすれていても／いきは じぶんで／い
きを している／いつ どこで、どんな ときにでも／／ああ なんてだろう／かみさま

が／いきに そう させて／みんなを いかして／くださってるんだなあ／／みんなを
ほんとに／だいすきなので…」

小説『まどさん』の作者で、詩人の坂田寛夫との対談で、「生かされているというのは、それは仏教の考え方なんでしょうか？」と尋ねられて、まど・みちおは「らしいです」と答えている¹⁹⁾。そして、「どうしてなのか」と不思議がっている。台湾での青年時代には、キリスト教の教会に通ったまど・みちおであるが、その後、緩やかに教会から去ったという。そして、「らしいです」と答えたまど・みちおは、「知らない間に私はそういうふうになるようになったんです。どうしてでしょうね」と付け加えている。おそらく、まど・みちおのころの奥底には、キリスト教の神様、あるいはもっと奥底には、仏教の精神が脈打っていて、それがわたしたちのころの奥底に共鳴するのではないか。自利利他、共生の原点も、ここに求められると思う。それは、ころの一番奥深い地点の出来事ではないのか。そのころの一番奥深いところには、魂や精神の棲んでいると考えられる。「どうしていつも」(1975)には、そのことが歌われている。

「太陽／月／星／／そして／雨／風／虹／やまびこ／／ああ 一ばん ふるいものばかり
が／どうして いつも こんなに／一ばん あたらしいのだろう」

魂と精神の世界には、一番古いけれども、一番新しいものが今も渦巻いているのである。このことが伝えられる保育、それが詩人まど・みちおの保育のころなのではないか。それを目指した保育実践は、決して難しいことではない。「ぞうさん」の歌、「やぎさんゆうびん」の歌、詩人まど・みちおの歌を、子どもと一緒に、心を込めて歌うことである。

(本稿は、1999年8月28日、淑徳大学千葉キャンパス10号館201教室を会場にして開催された第1回淑徳大学保育士セミナーにおける講演「童謡『ぞうさん』に学ぶ保育のころ」の講演原稿に基づき、これを大幅に加筆したものである。)

【注】

- 1) 『日本国語大辞典』(第四巻)小学館、763頁。
- 2) 新村出編『広辞苑』(第二版)岩波書店、785頁。
- 3) 河合隼雄、1967『ユング心理学入門』培風館、68頁。
- 4) 阿部晴政編集／伊藤英治編集協力、2000『文芸別冊／まど・みちお』河出書房新社、208頁。
- 5) 伊藤英治編、1992『まど・みちお全詩集』理論社、巻末著者紹介による。
- 6) まど・みちお／美智子選訳、1992『THE ANIMALS』すえもりブックス。
- 7) 1999年1月4日付け朝日新聞「天声人語」
- 8) 上掲書『まど・みちお全詩集』27～28頁。以下の作品もすべて本書からの引用である。
- 9) 坂田寛夫、1993『まどさん』(ちくま文庫)筑摩書房、123頁。
- 10) 上掲書『まど・みちお全詩集』720頁。

- 11) まど・みちお、1993「稀有の感性」上掲書『文芸別冊／まど・みちお』河出書房新社、59頁。
- 12) モーリス・センダック／神宮輝夫（訳）、1975『かいじゅうたちのいるところ』富山房。
- 13) 上掲書『文芸別冊／まど・みちお』208頁。
- 14) まど・みちお「詩とことば」谷悦子『まど・みちおー詩と童謡』創元社、1988、59頁。
- 15) ジョン・ボウルビー／黒田実郎（訳）、1967『乳幼児の精神衛生』岩崎学術出版社、54頁。
- 16) 多々良紀夫、1999『救援物資は太平洋を越えて／戦後日本とララの活動』（財）保健福祉広報協会、41頁。
- 17) カミュ／窪田啓作・矢内原伊作（訳）1958『結婚・シジフォスの神話／カミュ著作集V』新潮社、146頁。
- 18) 戸川行男、1972『自我心理学』金子書房、105～124頁。
- 19) 上掲書『文芸別冊／まど・みちお』99頁。